

青陵

第 160 号

二〇二〇年七月八日発行
発行者 奈良県立
橿原考古学研究所
奈良県橿原市畝傍町一番地
編集者 水野敏典

纏向遺跡出土の線刻文様をもつ土器片

杉山拓己

一、はじめに
今回紹介するのは、橿原考古学研究所附属博物館が所蔵する、桜井市纏向遺跡辻地区土坑一二出土の土器片である。

線刻文様が施されたこの土器片は、報告書^①にも掲載された資料であったが、詳細な検討が行われる機会のないままであった。また、管見によればこれまでの当該期の土器文様等を扱った研究論文や展覧会等においても取り上げられていない。

そこで今回は筆者が新たに作成した実測図を示し、若干の検討を加えることにした。

二、出土遺構の概要と既往の評価

土坑一二は一九七一年に県営纏向団地予定地で実施された纏向遺跡第五次調査で確認された遺構である。

調査地点は周辺の地形区分における太田北微高地の北縁に位置する。本遺構から西へ約四mの所で南北方向の溝一二が、西北西へ向かって流れる古墳時代前期河道と交わっている。

遺構の平面形は不整形な五角形状を呈し、大きさは長軸一五〇cm、短軸一二〇cmである。深さは四三cmで底は砂層に達しており、湧水が想定されている。また、東側の立ち上がりにはのみ、長さ八〇cm、幅四〇cmの木の板一枚が立てられていた。土坑内の埋土は黒褐色土で、底に接して大型の鉢形土器一点と二〇cm大の自然石三点や板片等が出土したとされる。

報文では遺構の時期は纏向三式とされている。これは鉢形土器の編年的な位置づけによるものと考えられ

目次

纏向遺跡出土の線刻文様をもつ土器片
中国陕西省における研修(下)
平城宮から大峯山は見えるか(上)
附属博物館関連展示案内・海外交流・ひとの動き

杉山拓己 1
北井利幸 3
卜部行弘 5
編集部 7

る。なお、報告書における遺構の記述中には線刻文様をもつ土器片への言及はない。

線刻文様をもつ土器片は、報告書「Ⅲ. 遺物篇」の「第一章 古墳時代前期の遺物」中の「五. 特殊埴輪」の節に、「刻線文様のある土器片」として拓本と写真を用いて掲載された(図一四三および図版二〇九)。

その後、一九九一年に刊行された博物館所蔵の同遺跡出土資料を収録した目録^②には、解説文付きで写真が掲載された(資料番号四三一五)。

次節で詳述する線刻文様について、報告書では「近畿第5様式期に比較的多い刻線文様の系譜をひくもの」と述べられている。これに対して目録の解説文では「稚拙な直弧紋」と評されている。両者ともにその評価に至る過程は明らかではないが、文様の位置づけについては異なる評価が下されている。

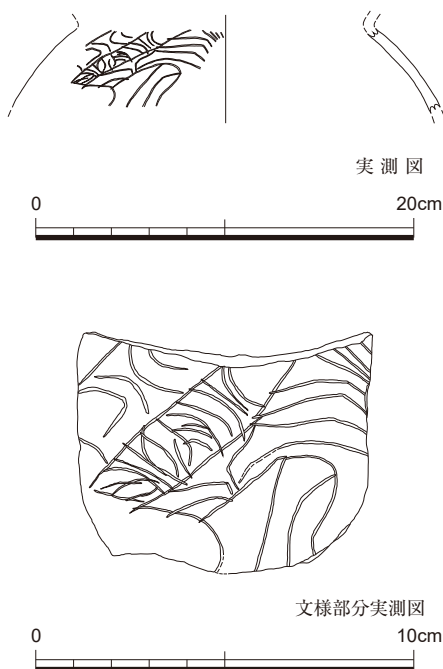


図1 土坑12出土の線刻文様をもつ土器片

三、資料の詳細

高さ六・四cm、幅七・八cmの破片で、目録の記載のとおり、壺形土器

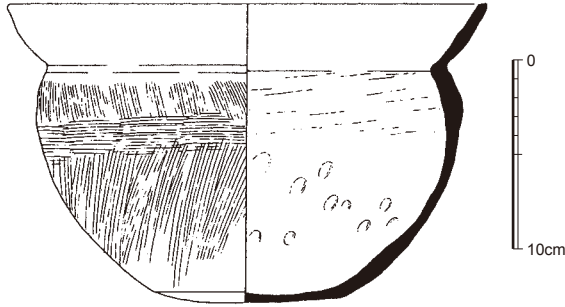


図3 土坑12出土鉢形土器（註1 報告書より引用）

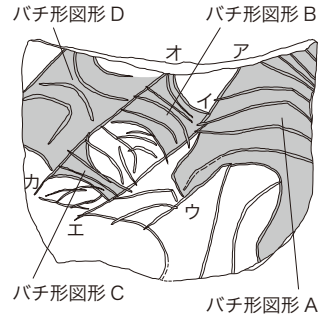


図2 線刻文様の構成

の肩部と考えられる。破片の上辺は頸部の屈曲部分の円弧に沿って割れたとみられ、正確性には欠けるがそれを手がかりに径や傾きを復元して図化した（図1上段）。図のとおり、壺形土器としてはやや小さい部類で、なで肩の体部に復元できる。以下で細かい観察所見を述べるが、文様については前述した報告書の写真図版もあわせて参照されたい。

外面は平滑に調整されている。一部には光沢も認められるが、明確な単位は認められないことから、ヘラミガキではなくナデと考えられる。内面は表面が剥落している箇所が多いが、ナデ調整である。厚さは五mm前後である。

外面の大部分は黒班に覆われているが、一部に残る本来の色調は10YR8/4浅黄橙で、内面も同色である。破断面の色調は10YR5/1褐灰。焼成は良い。胎土は精良で砂粒がほとんど含まれず、○・五mm以下の暗褐色の土粒や白色・灰色の砂粒がわずかに認められるのみである。

外面の残存部分のほぼ全体にわたって施される線刻文様は、焼成前の器面に鋭い原体で描かれた単線から構成される（図1下段）。線の幅は○・七mm前後である。描かれているのは

直線と弧線から構成される抽象表現であるが、直線による区画と、背合わせに向いあつた弧線に着目すると、複数のバチ形図形が配置されている状況が見いだせる（図2）。

まず、アからイを経てウに到る線を上辺とする大形のバチ形図形Aが認められる。その左下には弧線や直線が描き足されている。そして直線イエとそれに平行する直線オカとの間には、二つのバチ形図形B・Cが配されている。BとCの間には葉脈状に短い弧線が配され、Cの左下では直線エカにより区画されて生じた空間に弧線三条を配している。これらの左上にあるのが、直線オカを底辺としたバチ形図形Dである。

先述したように破片の上辺は頸部の屈曲部分となると考えられるため、上方にさらに文様が展開したとは考えにくい。よってバチ形図形B・CおよびDは、本来の文様全体の中では周縁を装飾する部分であつたと考えられる。バチ形図形Aは、それ自身が中心的モチーフの一部であるか、右下方に別の中心的表現があるかのいずれかであろう。

四、線刻文様の位置づけ

当該期のバチ形図形は、組帯文⁽³⁾の

帯状表現の一部が取り出されて成立したモチーフと考えられており、組帯文の系統に属する文様の中でも、土器の線刻文様に多用されるものとして評価されている⁽⁴⁾。

今回紹介した纏向遺跡例は全体の構図が明らかではないがバチ形図形と直線・曲線の組合せが認められた。これまでに知られている組帯文系の土器の線刻文様の中で、これに關係すると考えられるのが、直線的な帯状表現とバチ形図形が組み合わせられた事例である。これらは、弥生時代後期後半から、古墳時代前期にかけて認められる⁽⁵⁾。

本例では、複線構成の帯状表現が認められず、代わって単線が多用されている。また、バチ形図形の両側に線を描き足してモチーフが不明瞭になっている。これらのことから、帯状のものを表現しようという意図はほとんど感じられない。よって組帯文本来の表現からさらに変容がすすんだものといえるであろうか。

本例の年代的な位置づけの材料となるのは、前述した、同じ遺構から出土している鉢形土器である（図3）。底部は大きく、胴部との境に明瞭な稜線をもつ。底面は下方にわずかに膨らんでいる。丁寧にヨコナデ調整

される口縁部はわずかに内弯し、端部に水平の面をもつ。体部の調整は、外面が斜方向のハケメで、肩部にのみ断続的な水平方向のハケメが走る。内面はヘラケズリおよび指頭圧痕が伴うナデである。

こうした特徴は、畿内地域に通用の鉢形土器とは異なるものである。先に述べた底部の特徴を取り上げると、類似するものが山陰地方に散見され、たとえば松井潔による編年のⅫ期からⅩⅣ期にかけての資料中に存在する。山陰地方を中心とする土器編年の対応関係を参考にとすると、これは纏向四類から五類に併行すると考えられる。ただし、山陰の例はいずれもその地域に特有の有段口縁をもつもので、纏向のものとは口縁部の作りが異なる。

土坑一二の鉢形土器の体部調整に着目すると、薄手の作りではないものの布留式の甕形土器と通じるものがある。同器種の変遷においては、肩部の横方向のハケメは纏向四類に少量みられ、五類に増加する。

以上のことから、土坑一二の時期を相伴する鉢形土器により纏向四類から五類とし、線刻文様をもつ土器片の帰属時期としたい。

五、おわりに

今回、纏向遺跡辻地区土坑一二出土土器片の線刻文様を検討し、組帯文系文様の一種として評価した。

纏向遺跡では石塚古墳周濠から出土した「弧文円板」をはじめとして、同じ系譜上の文様をもつ遺物がまともに認められる。これらは特殊器台の文様を除けば木製品・石製品が中心であったが、集落内祭祀に使用される土器文様としても存在することが確認できた。

註

(1) 奈良県立橿原考古学研究所編『纏向』桜井市教育委員会 一九七六年

(2) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『大和考古資料目録』第一八集 一九九一年

(3) 弥生時代後期から古墳時代前期に展開し、のちに直弧文を生み出すこの類の文様は弧帯文と呼称されることも多いが、石野博信にしたがい、組帯文とする。

(4) 石野博信「報告書『纏向』以後の調査成果と新知見」『大和考古資料目録』第一八集 一九九一年
このことは多くの文献で論じられているが、紙幅の都合でここでは代表的なもののみを挙げる。

櫻井久之「直弧文と文様モチーフ」

『古墳時代の考古学』六 同成社

二〇一三年

宇垣匡雅「弧帯文の特性」『古代吉備』第二九集 二〇一八年

(5) この文様構成については、櫻井久之による詳しい検討がある。

櫻井久之「大阪府安福寺石棺の文様について―「原単位文」の提唱―」『大阪歴史博物館研究紀要』四 二〇〇五年

(6) 松井 潔「東の土器、西の土器―

山陰東部における弥生時代中期後葉―古墳時代初頭の非在地系土器

中国陝西省における研修(下)

北井 利幸

四、西安での生活(159号から続く)

研究活動

派遣されるにあたり研究テーマを二つ設定しました。一つは青銅器の鑄造技術の研究、もう一つは博物館のユニバーサル化についての事例研究です。加えて豊岡副所長から殷・周代の金石文を読めるようになることという課題も設定されました。研究活動は西北大学文化遺産学院と陝西省考古研究院を拠点に行いました。陝西省考古研究院では書庫で関係文献・論文の収集を行ったほか、陝西省内の博物館や遺跡、発掘現場など

の動態―』『古代吉備』第一九集 一九九七年

渡邊 誠「古墳時代開始期前後における土器編年研究―山陰地域を素材として―」『島根考古学会誌』第二六集 二〇〇九年

(7) 豊岡卓之「『纏向』土器資料の基礎的研究」『纏向』第五版補遺篇 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 一九九九年

(8) 前掲註(1)

(9) 寺沢 薫「王権と都市の形成史論」吉川弘文館 二〇一二年

の視察を組んで頂きました。以下、視察先を記します。

発掘調査見学地(順不同)

【陝西省】劉家洼遺跡、石砦遺跡

【山西省】西呉壁遺跡

【河南省】漢魏洛陽城大極殿発掘調査現場、荊陽官庄遺跡、車庄遺跡踏査地(順不同)

【陝西省】西安城壁(各門)、鼓楼、鐘樓、青龍寺遺跡、興慶宮公園、大明宮國家遺跡公園、木塔寺遺跡、宝慶寺塔、小雁塔、大慈恩寺、大雁塔、広仁寺、青龍寺、閤極寺、大興善寺、臥龍禪寺、淨真西寺、西安清真大寺、

小皮院清真北大寺、天主堂西安教区南堂、南新街礼拜堂、法門寺、周原遺跡、始皇帝陵、華清池・華清宮、漢景帝陽陵、鎮北台、統万城遺跡、紅石峽、堯頭窯

【山西省】牛村宮殿台基、候馬白店銅遺跡

【河南省】漢魏洛陽城跡、永寧寺塔基壇、殷墟王陵遺跡、殷墟宮殿宗廟遺跡、殷墟婦好墓、比干廟、呂祖閣

【四川省】三星堆遺跡、金沙遺跡、永陵

【寧夏回族自治区】秦長城、鼓樓、西夏王陵一・三號墓、承天寺

研究施設参観（順不同）

西北大学文化遺產学院、陝西省考古研究院、石峁遺跡考古工作平台、劉家洼遺跡考古隊、中国社会科学院考古研究所西安研究室、榆林市文物保護研究所、榆林市文物考古勘探工作队、中国社会科学院考古研究所安陽研究室、河南省文物考古研究院、鄭州大学古荥整理基地、寧夏文物考古研究所、甘肅省考古研究所博物館参観（順不同）

【陝西省】西北大学博物館、陝西省考古研究院（展示室）、碑林博物館、陝西歷史博物館、西安博物院、西安唐皇城壁含光門遺跡博物館、陝西省美術博物館、西安半坡博物館、曲江

第二小学校児童博物館、西安曲江芸

術博物館、青龍寺遺跡博物館、大唐

西市博物館、中国社会科学院考古研

究所西安研究室（展示室）、大明宮

國家遺跡公園博物館、大明宮陶窯藝

術博物館、聖晋美術館、考古探索中

心、八路军西安辦事処紀念館、楊虎

城將軍紀念館、張學良公館、鐘樓（展

示室）、鼓樓（展示室）、法門寺博物

館、宝鸡市周原博物院、中国青銅器

博物院、岐山周原博物院、梁帶村

芮国遺跡博物館、劉家洼遺跡考古隊

（展示室）、鎮北台長城博物館、澄城

県博物館、始皇帝陵博物院、漢景帝

陽陵博物院、漢景帝陽陵南門遺跡展

示館、靖邊博物館、漢画像石博物館、

榆林民俗博物館

【山西省】晋国博物館、山西博物院、

西貝壁遺跡発掘調査事務所（展示室）

【河南省】洛陽博物館、漢魏洛陽故

城国家考古遺跡公園展示施設、殷墟

博物館、中国文字博物館、鄭州博物

館、河南省文物考古研究院（展示室）

【四川省】成都博物館、永陵博物館、

三星堆博物館、四川博物院、金沙遺

跡博物館

【甘肅省】甘肅省博物館

【寧夏回族自治区】寧夏固原博物院、

彭陽博物館、寧夏博物館、西夏史話

芸術館

研究課題

青銅器の鑄造技術の研究は発掘調査現場で炉跡と関連遺物の実見、博物館に展示されている青銅器の観察を中心に行いました。青銅器に残る鑄造欠陥は展示品にも多く確認でき、あわせてその補修技術も確認できました。ある墓の一括資料を見る機会があり、一見すると大変丁寧に作られた青銅器でしたが、細かく観察すると鑄掛けが至る所に認められ、丁寧に製作することよりも急いで量を作ることが重要であったのではないかと考える機会となりました。

中国の博物館のユニバーサル化について学ぶために必ず行きたい博物館がありました。それは曲江第二小学校児童博物館です。学校内に設置されているため基本的に見学不可でしたが、陝西省考古研究院の曹龍氏



写真2 鑄掛けを施した青銅器（商代）

が開館準備から関わっていたことから紹介頂き、見学できました。日本でよくみる校舎の一角に展示ケースを設置したようなものではなく、歴史、自然、税などテーマごとに展示室を設置した本格的な博物館でした。多くの展示品を触ることができ、楽器は音を鳴らすこともできました。歴史展示では実物を触ることが困難な青銅器や唐三彩の俑などの複製品を3Dプリンタで製作し、触察に対応していました。授業で習ったものに触れて、体感できる先進的な施設でした。健常者の学校のため点字解説はなかったですが、ユニバーサルな展示方法でした。大変良い施設でしたが、学校内という閉鎖的な性格のためこの施設を体験できるのは在校生だけでもつたなく感じました。このような取り組みは他の博物館にはまだありませんでした。今後こうした取り組みが曲江第二小学校の卒業生によって中国国内へと広がっていく可能性があります。日本国内でもこうした触って体感できる博物館は少ないため、博物館のユニバーサル化を考える良い機会となりました。また学校内にあるということから学校教育と博物館の活用についても考える機会となりました。

研究会への参加

陝西省考古研究院の王小蒙副院長から各地で開催される研究会の情報を提供頂き、積極的に参加しました。パワーポイントを使った発表が多く、漢字と写真を頼りに研究会を楽しみました。出土品の検討会もあり、鑄造関係遺物を実見することもできました。

発表

研修後半に陝西省考古研究院で研究発表を行うと聞いていましたが、今年度はありませんでした。しかし、



写真3、4 曲江第二小学校児童博物館展示室

陝西省考古研究院が三月上旬に実施した青年考古学者訓練で日本の発掘調査の方法について話をする機会を得たほか、西北大学文化遺産学院の二〇一七年度文物保護専攻の講義で日本の織物文化財を中心とした有機質文化財の授業を依頼されました。どちらも予期せぬテーマであったため準備に追われました。特に後者の講義は全く資料を持ち合わせていなかったため急遽奥山所員に問い合わせるため急遽資料を送って頂き、無事に終了しました。両発表では陝西省考古研究院の譚青枝氏、龍谷大学国際学部の方方吳氏に通訳頂きました。感謝申し上げます。

五、おわりに

派遣期間中に懐かしい出会いがありました。私が研究所に採用された二〇〇七年に中国社会科学院考古研究所から派遣されていた郭曉濤氏に十一年ぶりに再会することができました。十一年前、奈良県内の博物館を案内中に昼食をとり、回転寿司に入ったことを覚えておられました。再会を祝して誘われた食事は西安市内の回転寿司で、当時のことを思い出しながら食事を楽しみました。研修期間中に撮り溜めた写真は十

万枚を超えました。毎晩、その日のできごとをまとめながら写真の整理を進めたため苦労することなく整理できました。見返すとなると膨大な量ですが、日々の記録、手元のメモなどと照らし合わせて見ることで各種資料の見直し、再検討を容易にすることができました。

研修期間中は西安市内を中心に歩き回った結果、帰国時には体重が約十三kg減量していました。この文章が掲載される頃には元に戻っていません。

平城宮から大峯山は見えるか(上)

一、はじめに

令和元年九月七日、學峯講による菅谷文則元所長追悼大峯登拝が挙行され、筆者も講員として参加した。

學峯講とは、平成一七年七月に結成された、大峯修行を通じて山に学ぶことを目的とする大峯講である。講発足にあたっては菅谷氏を老分に仰ぎ、逝去されるまで親しくご指導を頂いた。

登拝は稲村ヶ岳組と山上ヶ岳組に分けて行い、後者は大峯山寺本堂で般若心経、真言を奉巻し、さらに日本岩へ場を移し、ここにおいても心

ければよいですが…。

派遣期間は一三五日間と決して長くなかったですが、慣れない土地での生活のため多くの方々にご援助頂きました。特に西北大学文化遺産学院、陝西省考古研究院のみならずは様々な場面でお世話になりました。また奈良県国際課、附属博物館、研究所の方々には日本からご支援を頂きました。紙幅に限りがあり、みなさまのお名前をあげられませんが末筆ながら感謝申し上げます。

卜部 行 弘

経、真言を奉巻して行を終えた。当日は快晴で日本岩から周囲の眺望は素晴らしく、北西方には金剛・葛城山越しに大阪湾からはるか明石海峡大橋の主塔まで目視できるほどであった。眺めを時計回りに北方へ転じれば、生駒山から矢田丘陵、平城山丘陵の山なみも良好に視認でき、さらに京都盆地から洛北の山なみも望むことができた(図1)。

その時ふと、平城山丘陵の西端からの距離を勘案すると、平城宮大極殿も視界に入っているのではないかと考えた。あいにく望遠鏡の類は持



図1 山上ヶ岳日本岩から北方への眺望 (令和元年9月7日筆者撮影)

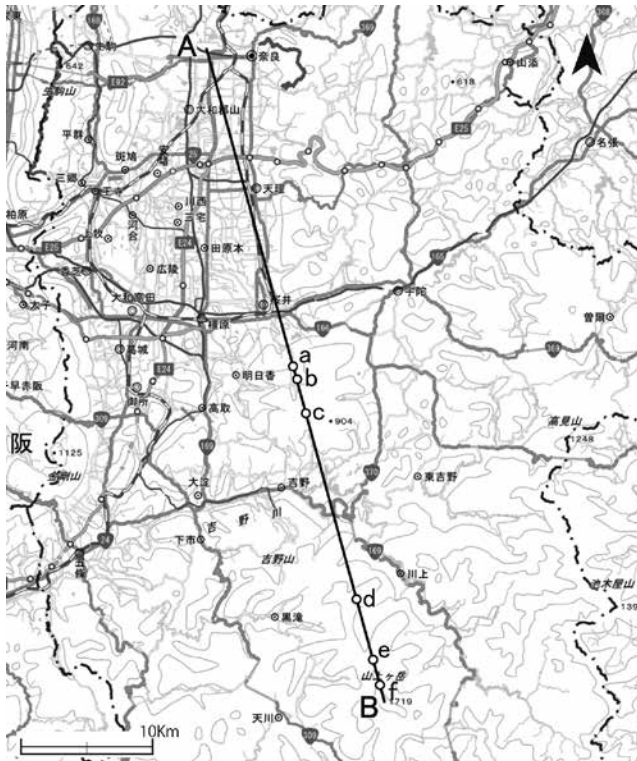


図2 平城宮第一大極殿 (A) と山上ヶ岳 (B)
(地理院地図を一部改変)

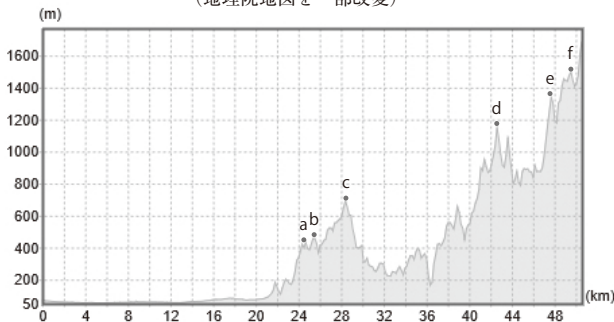


図3 平城宮第一次大極殿と山上ヶ岳間断面図
(地理院地図より自動生成)

ち合わせておらず、直接目視するに
は至らなかったが、その場で文化財
関係の講員諸氏に確認したところ、
特に否定する意見は返ってこなかっ
た。そのうちの一人で、平城宮の調
査研究に豊富な実績を有する小澤
毅氏からは、「見えているかもしれ
ない。」としたうえで、「地図ソフト
のカシミールなどで検証してみては
どうか。」とアドバイスを頂いた。

ここで筆者が大峰山から平城宮大
極殿への視通にこだわるのは、ほか
ならぬ菅谷氏が、平城宮から大峰山

は前山に遮られて見えないと断言さ
れ、それが氏の山中他界観批判の一
つにされているからである。菅谷氏
は、従来の山中他界観による大峰山
中の山岳遺跡や山岳信仰への解釈が、
奈良盆地から「見える」吉野山や大
峰山に祖先の霊が帰っていくのでそ
こに信仰や遺跡が発生したとするの
に対し、大峰山が見えるのは奈良盆
地の一部だけで、平城宮から大峰山
は「見えない」という事実からその
ような解釈は成り立たないと批判す
る。

大峰山から平城宮大極殿が見える
のであれば、逆の平城宮大極殿から
も見えることになるであろう。勿論、
場所によって宮内や周囲の施設に遮
蔽される可能性もあるし、たとえ見
えたとしても天候や光線の条件によ
りその機会が数年に一回、あるいは
目視では山なみの上にわずかに頂を
のぞかせる程度かもしれない。ただ
そうであっても、一方の視通が確
実ならば、互いに視通し合えるもの
と意識され、おのずとその意味合い
も違ってくるだろう。小文ではその

ような認識の下、なによりも議論の
前提となる「見える」「見えない」
の事実関係について地図ソフトによっ
て検証し、小澤氏のアドバイスを応
えたい。

二、地理院地図による断面図からの 検討

平城宮大極殿から大峰山への視通
については、特別な地図ソフトを使
用せずとも、国土地理院が^②上で
公開・提供する地理院地図の断面図
機能によって検証することができる。

表1 各地点の地理データ

地点	世界測地系 X 座標	世界測地系 Y 座標	標高 (m)	A からの距離 (m)	A からの仰角
A 平城宮第一次大極殿基壇上	-144,884.000	-18,851.000	77.90	0	0
a 桜井市下居付近	-168,739.932	-12,399.191	430.22	24,706	0° 49' 01"
b 桜井市北山付近	-169,556.708	-12,178.525	455.63	25,552	0° 50' 49"
c 桜井市鹿路付近	-172,333.652	-11,428.297	690.56	28,429	1° 14' 04"
d 川上村四寸岩山東方	-186,054.963	-7,721.148	1154.14	42,644	1° 26' 44"
e 大天井ヶ岳東方	-190,955.491	-6,397.132	1323.29	47,720	1° 29' 42"
f 洞辻茶屋南方峰	-192,752.321	-5,911.660	1495.55	49,582	1° 38' 16"
B 山上ヶ岳日本岩	-193,732.427	-5,646.937	1694.63	50,597	1° 49' 49"

先ず地理院地図上で奈良市佐紀町の平城宮第一次大極殿を始点Aとして、天川村洞川の山上ヶ岳頂上付近の日本岩を終点Bとする線分(図2)を設定し、断面図を作成した(図3)。次に断面図と標高データから、この線分上においてA・B間の視通の障壁となるような地点を拾い上げると、図2、3のaからfまでの六ヶ所である。

いま仮に、Aの平城宮第一次大極殿基壇上南辺に眼高一・五mの人が立ち、Bを見たならば、その仰角は一度四九分四九秒である。先にあげた障壁と目されるaからfまでの六ヶ所の地点を同じ条件でAから見たならば、それぞれの仰角は表1の通りとなる。いずれもA―Bの仰角よりも小さくなって、Bの前を遮るような障壁にはならない。したがって計算の上ではあるが、平城宮第一次大極殿から大峯山の視通は可能である。九月六日の登拝時に見た北方の視界の中には、復元された平城宮第一次大極殿の薨が輝いていたはずである。ちなみに六ヶ所の内の最大の仰角となるfでは、その一六六・七六m上に大峯山が見えていることになる。(二六一号へ続く)

附属博物館関連展示案内

◎附属博物館巡回特別展

『しきしまの大和へ』

―アジア文華往来―

主催…附属博物館・横浜ユーラシア文化館・東京新聞

開催期間…令和二年六月一三日(土)

七月一二日(日)

開催場所…横浜ユーラシア文化館

*以降の巡回館

九州国立博物館、島根県立古代出雲歴史博物館

◎県内市町村との共同企画展

『唐古・鍵遺跡と清水風遺跡出土品の里帰り展』

よみがえる弥生の祭場
―唐古・鍵遺跡と清水風遺跡―

主催…附属博物館・田原本町唐古・鍵考古学ミュージアム

開催期間…令和二年十月二四日(土)

十一月六日(日)〈予定〉

開催場所…田原本町唐古・鍵考古学ミュージアム

海外交流

受入…中国寧夏文物考古研究所の郭家龍氏(専門…中国旧石器)は、昨年九月一七日から一〇ヶ月間の研修予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で研修期間を短縮し、本年六月二日に帰国されました。

ひとの動き

(退職 令和二年三月三一日付)

豊岡卓之 副所長 附属博物館長・兼務(定年)

入倉徳裕 企画部長 附属博物館副館長・兼務(定年)

↓文化・教育・くらし創造部 文化資源活用課主査(再任用)

橋本裕行 企画部企画課長(定年)

↓明治大学文学部兼任講師

(転出 令和二年三月三一日付)

伊豆充弘 総務課長

↓青翔高等学校事務長

小山雅秀 総務係長

↓吉野土木事務所用地・管理課用地係長

光石鳴巳 調査部調査課調査第二係

総括研究員 地域振興部

文化財保存課調整員

↓文化・教育・くらし創造 部文化財保存課課長補佐 (記念物・埋蔵文化財担当) 廣岡孝信 調査部調査課調査第一係 指導研究員	↓調査部長 上田美鈴 奈良県税事務所課税第二 課外形標準課税調査係長 中南和果税事務所・兼務 ↓総務課長 米川仁一 調査部調査課調査第一係 長	指導研究員 北井利幸 附属博物館学芸課学芸係 主任研究員 ↓企画学芸部学芸課指導研 究員	大西貴夫 調査部調査課調査第一係 指導研究員 ↓調査部調査課調査第一係 長
↓調査部調査課調査第二係 総括研究員 文化・教育・ くらし創造部文化財保存 課記念物・埋蔵文化財係 調整員・兼務 宇野隆志 調査部調査課調査第一係 主任研究員	↓企画学芸部企画課長 吉村和昭 附属博物館学芸課長 ↓企画学芸部学芸課長 鈴木裕明 企画部企画課企画係長 ↓調査部調査課長 水野敏典 企画部資料課資料係長 ↓企画学芸部企画課副主幹 企画係長・兼務 鶴見泰寿 附属博物館学芸課学芸係 指導学芸員 地域振興部 文化資源活用課・兼務 ↓企画学芸部資料課資料係 長	重見 泰 附属博物館学芸課学芸係 主任研究員 ↓企画学芸部学芸課学芸係 主任研究員 杉山拓己 企画部企画課企画係主任 研究員 ↓企画学芸部資料課資料係 主任研究員 高橋幸治 明日香村文化財課 ↓調査部調査課調査第一係 指導研究員 内藤元太 調査部調査課調査第二係 主任技師 地域振興部文 化財保存課主任技師・兼 務	齊藤 希 調査部調査課調査一係主 任技師 ↓調査部調査課調査一係主 任研究員 木村結香 調査部調査課調査二係技 師 ↓調査部調査課調査二係主 任技師 (再任用 令和二年四月一日付) 新田育久 教育委員会 西和養護学 校事務長 ↓総務課主査 東田 浩 文化会館副館長 文化会 館業務課長・兼務 ↓総務課主査
↓文化・教育・くらし創造 部文化財保存課課長補佐 (明日香村派遣) 明日香村文化財課長 (転入・所内異動) 令和二年四月一日付 岡林孝作 調査部長 ↓副所長 附属博物館長・ 兼務 坂 靖 地域振興部文化財保存課 主幹 課長補佐・兼務 ↓企画学芸部部長 川上洋一 調査部調査課長	青柳泰介 附属博物館学芸課学芸係 長 ↓企画学芸部学芸課学芸係 長 西村由紀子 総務課主任主査 附属 博物館業務係・兼務 ↓総務課主任主査 小栗明彦 附属博物館学芸課学芸係指 導学芸員 ↓企画学芸部企画課企画係 長	米田敏幸 調査部調査課調査第一係 嘱託職員 ↓調査部調査課調査第一係 会計年度任用職員(発掘 調査) (昇任 令和二年四月一日付) 榎本 保 総務課総務係主任主査 ↓総務課総務係長	(新規採用 令和二年四月一日付) 平井洸史 企画学芸部企画課技師 辰巳祐樹 調査部調査課調査第一係 技師 西浦 熙 調査部調査課調査第一係 技師 (新規採用 令和二年五月一日付) 漆原尚樹 調査部調査課調査第一係 会計年度任用職員(発掘 調査)